

高等学校における生徒指導上の諸問題と効果的な実践との関連性 —テキストマイニングによるアプローチ—

三浦 巧也 東京農工大学工学部
 橋 千晶 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
 杉岡 千宏 東京学芸大学大学院教育学研究科
 堂山 亜希 目白大学人間学部
 橋本 創一 東京学芸大学教育実践研究支援センター

要旨：本研究の目的は、高等学校における生徒指導上の諸問題の現況と、当該生徒に対する効果的な実践との関連性を明らかにすることである。高等学校(453校)の生徒指導担当教諭を対象に、質問紙調査を実施した。その結果、効果的な実践において、発達障害がある生徒の事例が最も多くあげられた。自由記述によって得られた質的データを基に、テキストマイニングを用いて解析したところ、当該生徒に直接介入した事例が多いことが示された。また、コレスポンデンス分析の結果、個々の障害・疾患や不適応の状態に応じた介入と、全ての事例に共通した介入のそれぞれが抽出された。最後に、高等学校における生徒指導上の諸問題に対する、効果的な実践の現況について考察した。

Key Words： 生徒指導上の諸問題，効果的な実践，テキストマイニング，高等学校

● ————— I. はじめに

思春期の生徒は、「自分とは何か、何をすべきか」について問い、答えを求めて悩む時期である。精神的にとっても傷つきやすく、不登校や非行、抑うつ傾向などの症状に繋がってしまう場合がある。家庭や学校、友人関係がうまくいかないほど、問題行動に繋がる確率は高くなる(笹森, 2011)¹¹⁾。生徒に何らかの問題が生じた場合は、教諭がどのように子どもの生き方を指導し支えていくのか、高校生であれば特に子どもと共に考えていくべきである(田代・八重樫, 2009)¹⁶⁾。

しかしながら、高等学校では、義務教育ではないということで、指導や相談に積極的ではない教諭は珍しくない(秋光・岡田, 2000)¹⁾。また、生徒への取り組みについて効果が見られず、問題が多発する環境では、教諭が指導への限界やあきらめを抱き、問題をさほど大きな問題とはとらえられなくなるという感覚の麻痺が生じる可能性が指摘されている(内田・伊賀,

2008)¹⁷⁾。さらに、兼子(2011)¹⁸⁾は、教師の多忙感により新しい取り組みに対して、忌避意識があると述べている。

加えて、東日本の高等学校受験時の偏差値50未満の高等学校に勤務する養護教諭を対象とした調査(田口・橋本, 2015)¹³⁾において、高等学校では発達障害や精神疾患等のある生徒への対応は、小中学校に比べて遅れており、教諭が生徒の正確な情報や知識を学ぶ機会が十分に提供されているとは言い難いことが指摘されている。特に、低学力校と回答した高等学校では、心理的悩みや身体愁訴以外の理由による保健室来室が多い傾向が見られ、発達障害やメンタルヘルス等に起因する不適応への支援が問題となっている(田口・橋本・菅野・横田, 2009)¹⁴⁾。

さらに、文部科学省(2009)⁸⁾の高等学校における特別支援教育の推進に関する調査では、調査対象となった特別支援学級に在籍していた中学生の23%が、高等学校に進学していることを明らかとした。また、発達障害のある生徒は、調査対象生徒総数の約2%程度におよぶことも

示された。

以上のことから、高等学校における生徒指導上の諸問題への介入は、教諭各自が個別に対応している傾向があり(西尾, 1996)⁹⁾、また、それぞれの学校の風土(学力や教育課程の違い)を考慮した取り組みが望まれるのであろう。

さて、特別支援教育が開始される以前より、発達障害や精神疾患の生徒、不登校および非行等の不適応に対する指導・支援は、生徒指導担当教諭が担任や養護教諭と共に担ってきた。生徒指導とは、子ども一人ひとりのよさや違いを大切にしながら、彼らの発達に伴う悩みの解決と夢や希望の実現を目指す総合的な個別発達援助(八並, 2008)¹⁰⁾と定義されている。高等学校における生徒指導担当教諭は、生徒の状況に関するアセスメントや支援の判断・調整に係る情報を収集する役割を担っていることが示めされている(瀬戸・石隈, 2002)¹²⁾。しかしながら、瀬戸・石隈(2002)¹²⁾の調査研究以外に、高等学校の生徒指導担当教諭が調査の対象となった研究は見当たらず、生徒に対して実際にどのような実践を行ったのかは明らかとなっていない。加えて、生徒指導上の諸問題が軽減・改善したとされる事例を、実証的に整理した研究も見当たらなかった。

そこで、本研究では、高等学校の生徒指導担当教諭を対象に、生徒指導上の諸問題に対する実践の中で、当該生徒の問題や課題が改善・軽減した、効果がみられた事例の内容を把握する。そして、生徒指導上の諸問題と抽出された効果的な実践との関連性を、テキストマイニングを用いて実証的に検証することを目的とする。なお、低学力と回答した高等学校では精神的不調や発達障害等の支援のニーズが高いことが指摘されている(田口ら, 2009)¹⁴⁾ことや、非進学校は学校生活満足度が進学校よりも低い(河村, 1999)⁶⁾ことを鑑み、本研究では、高校受験時の偏差値が 50 未満の公立高等学校(普通科)の生徒指導担当教諭に調査を依頼する。

●

II. 方法

1. 調査対象者

東日本(東京都, 神奈川県, 埼玉県, 千葉県, 群馬県, 山梨県, 栃木県, 茨城県, 福島県, 宮城県, 山形県, 秋田県, 青森県, 北海道)の公立高等学校(普通科)から、受験情報誌やサイト(イトクロ(株), 2012; 家庭教師のトライ(株)教育

情報センター, 2012; 旺文社学校案内編集部, 2012)²⁾⁵⁾¹⁰⁾を参考に、いずれの雑誌・サイトでも高校受験時の偏差値 50 未満に位置づけられていた 453 校に勤務する、生徒指導担当教諭を調査対象者とした。調査対象者である高等学校生徒指導担当教諭 81 人(男性 70 人, 女性 10 人, 不明 1 人)から質問紙を回収することができた。回収率は、17.9%であった。生徒指導の担当年数は平均 9.32 年(最長 30 年, 最短 1 年)、標準偏差は 7.59 であった。

2. 調査期間・方法

調査期間は、2012 年 7 月から 8 月までとした。郵送法による質問紙調査を実施した。なお、調査を依頼した高等学校の管理職および生徒指導担当教諭に対して、本研究の目的と手続き並びにプライバシー保護のための手立て(統計的に処理等)を書面で説明し、回答をもって同意を得た。

3. 効果的な実践に関する項目

調査対象の生徒指導担当教諭に対して、これまでに生徒指導上の諸問題に対する介入において、実践の効果がみられた 1 事例をたずねた。本研究における効果的な実践とは、当該生徒の生徒指導上の問題や課題が、改善・軽減した際に取り組んだ介入を示す。具体的な実践内容は、自由記述にて回答をたずねた。また、効果的な実践事例に関して、生徒指導上の諸問題を、「発達障害」「精神疾患」のある生徒、「不登校」「非行」等の不適応(その傾向がある生徒を含む)とし、該当する項目全てにチェックをしてもらった(なお、複数回答を可とし、該当しない場合には無記入も可とした)。

4. 自由記述の分析方法

自由記述式の質問項目については、テキストマイニングを用いた。本研究では、高儀・恩田・岩城・西川・荒川(2011)¹⁵⁾によるテキストマイニング分析を採択した。自由記述のデータ分析には、SPSS Text Analysis For Survey 4.0.1 を用いて以下の分析を実施した。

①記述文からのキーワード(語や語句)の抽出、②抽出されたキーワードを使用したカテゴリ化、③カテゴリ間の関係性を把握するための視覚化という 3 つの作業を行った。本研究では、前処理(同じ質問に対して複数の回答者が異なる単語を使用している場合、内容が同様であれば 1 つの単語に統一する作業)はせず、句点による改行の処理を行った。そして、カテゴリ化した後

に各回答が割り振られたカテゴリを確認し、記述内容と該当カテゴリの調整を行うこととした。

①のキーワードの抽出では「感性分析」を行った。「感性分析」とは、単語の「品詞」と「肯定的・否定的等のニュアンス」の組みあわせから言葉の表現を抽出する方法である。②のカテゴリ化では、主に名詞をまとめる「言語学的手法に基づく」方法を用いた。この手法では「内包」(一方の共通の文字列である単語を含むかどうかに基づき、複合語をグループ化することによってカテゴリを作成する)と、「共起規則」(回答内で強い関連を持つキーワードを見つけカテゴリを作成する)といった2つの分類方法を行った。さらに、「出現頻度手法に基づく」方法によってカテゴリを補った。今回は頻度5回以上を条件とした。加えて、「本人」と「生徒」といった同義語であるキーワードを1つのカテゴリにまとめる作業や、回答内で意味をもたない不要なカテゴリの削除作業を行い、カテゴリの調整を行った。③の視覚化では、「web グラフ」を採用した。web グラフでは、各ノード(点)の大きさがカテゴリのレコード(データ)数の大きさを表している。また、2つのカテゴリを結ぶリンク(線)は、共有するレコード数を表している。本研究で採用したサークルレイアウトは一般的なものであり、全てのノードが同等でノードの遠近には意味を持たず、リンクには方向性がないものとして表示される。

5. 生徒指導上の諸問題と効果的な実践との関連性

生徒指導上の諸問題と、効果がみられた実践との間にどのような特徴あるのかを検討するため、はじめに、テキストマイニングによって得られたカテゴリの回答データを用いたコレスポンデンス分析を行った。コレスポンデンス分析では、クロス集計表の行要素と列要素双方の度数を用いて相対比較し、得られた座標値を平面の共通した次元上に近似プロットすることで、点の間の遠近の程度をデータの類似関係として把握した。

次に、コレスポンデンス分析によって得られた次元(次元1・次元2)得点をもとに、生徒指導上の諸問題(「発達障害」「精神疾患」「不登校」「非行」)ごとのデータを用いて層別散布図を作成した(今回は、次元2を利用して層別した)。

最後に、実践内容の散布図と、生徒指導上の諸問題に関する層別散布図を重ね合わせて表示した(Fig. 3)。なお、このとき座標軸に値する

次元については解釈を行わない(君山, 2005)⁷⁾。分析には SPSS Statistics 23.0 を使用した。

III. 結果

1. 生徒指導上の諸問題

生徒指導担当教諭 81 名が介入した生徒指導上の諸問題に関して、実践の効果がみられた事例で最も多かったのは「発達障害」であり、38 事例(46.9%)であった。次いで、「不登校」が 22 事例(27.2%)、「非行」が 14 事例(17.3%)、「精神疾患」が 9 事例(11.1%)であった。また、「発達障害」のみに該当したのは、26 事例(32.1%)であった(Table1)。

2. 実践内容に関するテキストマイニング

自由記述の内容を句点による改行の処理を行った結果、138 個のテキストデータが得られた。次に、テキストマイニングにおける感性分析を用いてキーワードを抽出した結果、頻度(レコード数)の高い順に、「本人」31 回、「保護者」18 回、「教員」16 回、「面談」16 回等と続いていた。このキーワードを前述の手法でカテゴリ化した結果、14 個のカテゴリが作成でき、記述回答者 100%の回答がこれらカテゴリに分類された。Fig.1 に、分類されたカテゴリのレコード数を示す。

さらに、このカテゴリ間の関係を web グラフで視覚化し、Fig.2 に示す。リンク数が 5 以上のリンクは「本人-理解-連携」「本人-教員-面談」「本人-面談-聞く」であった。さらに「本人-周囲の生徒-指導」といったノードのリンクも強く、「本人」の回答が中心となっていた。また、「保護者-連携」「保護者-理解」「教員-共通理解」といったノードのリンクも比較的強いことが示された。

3. 生徒指導上の諸問題と実践内容カテゴリとの関連性

生徒指導上の諸問題(「発達障害」「不登校」「非行」「精神疾患」)に対する、効果がみられた実践との関連性を検討するため、以下の分析を実行した。

はじめに、コレスポンデンス分析による散布図を作成した(イナーシャ寄与率 23.3%)。次に、分析によって得られた次元2得点を用いて、生徒指導上の諸問題ごとの層別散布図を作成した。最後に、実践内容の散布図と、生徒指導上

の諸問題における層別散布図を重ね合わせて表示した(Fig.3).

Fig.3 では、全ての生徒指導上の諸問題に対して、「本人」と「教員」および「連携」が近くに配置された。また、実践内容の「聞く」と「共通理解」が特に近くに配置された。

「発達障害」の事例では、実践内容の「理解」「生活」「声かけ」が近くに配置された。「不登校」の事例では、「周囲の生徒」「受け入れる」が近くに配置された。「非行」の事例では、「面

談」が近くに配置された。「精神疾患」の事例では、「保護者」が近くに配置された。

● ————— IV. 考察

高等学校における生徒指導上の諸問題に対する実践の効果がみられた事例では、「発達障害(またはその疑い)」のある生徒への支援が 38 事例(46.9%)と最も多いことが示された。その

Table1 生徒指導上の諸問題

		ケース数	%
支援ニーズ (重複含) n=100	発達障害	38	46.9
	不登校	22	27.2
	非行	14	17.3
	精神疾患	9	11.1
	該当なし	17	21.0
複数回答 の内訳 n=81	発達障害のみ	26	32.1
	発達障害-不登校	3	3.7
	発達障害-不登校-非行	3	3.7
	発達障害-不登校-非行-精神疾患	0	0.0
	発達障害-不登校-精神疾患	1	1.2
	発達障害-非行	1	1.2
	発達障害-非行-精神疾患	0	0.0
	発達障害-精神疾患	4	4.9
	不登校のみ	12	14.8
	不登校-非行	3	3.7
	不登校-非行-精神疾患	0	0.0
	不登校-精神疾患	0	0.0
	非行のみ	7	8.6
	非行-精神疾患	0	0.0
	精神疾患のみ	4	4.9
	該当なし	17	21.0

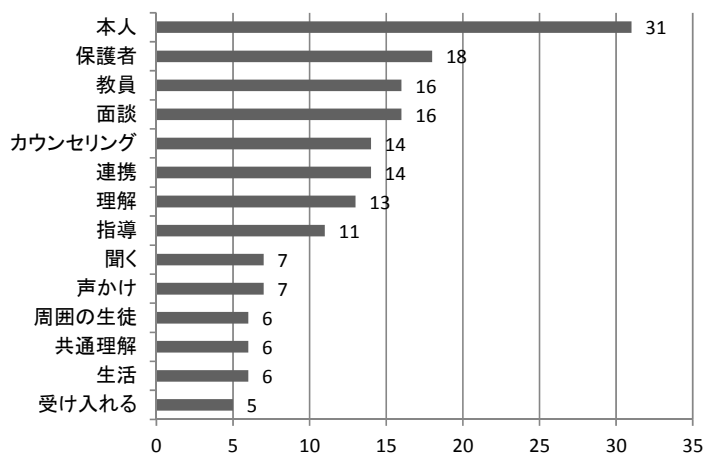


Fig. 1 実践内容におけるカテゴリの記録数

うち、「発達障害」のみに言及したのは 26 事例 (32.1%)だった一方、「精神疾患」が合併していた事例や、現象として不登校や非行が重複した事例は、12 事例(14.8%)であることも明らかとなった。

また、記述回答に対するテキストマイニングの結果から、生徒指導担当教諭は、当該生徒本人への直接的介入を多く取り上げていることが示された。加えて、web グラフのノード(点)とリンクに相応した記述をみると、当該生徒に対して生徒指導担当教諭は、保護者と生徒の理

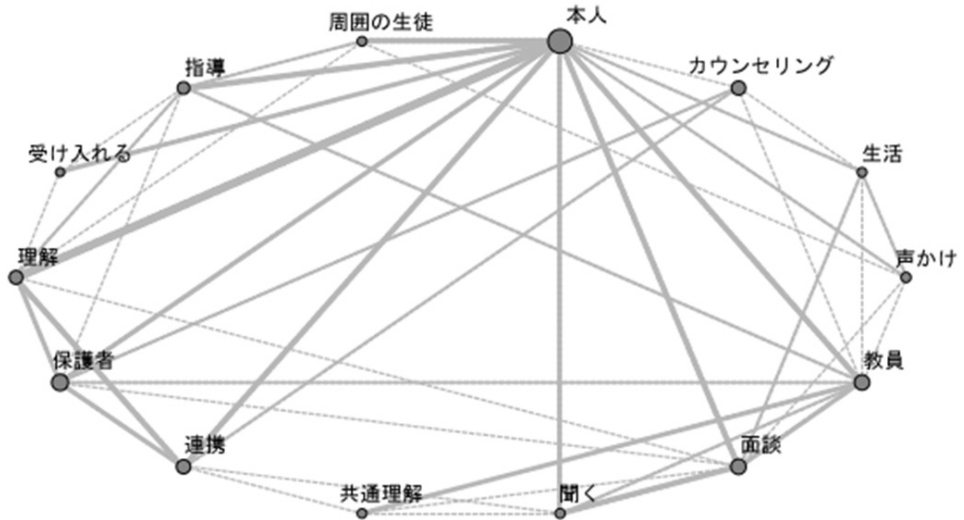


Fig. 2 実践内容におけるカテゴリの web グラフ

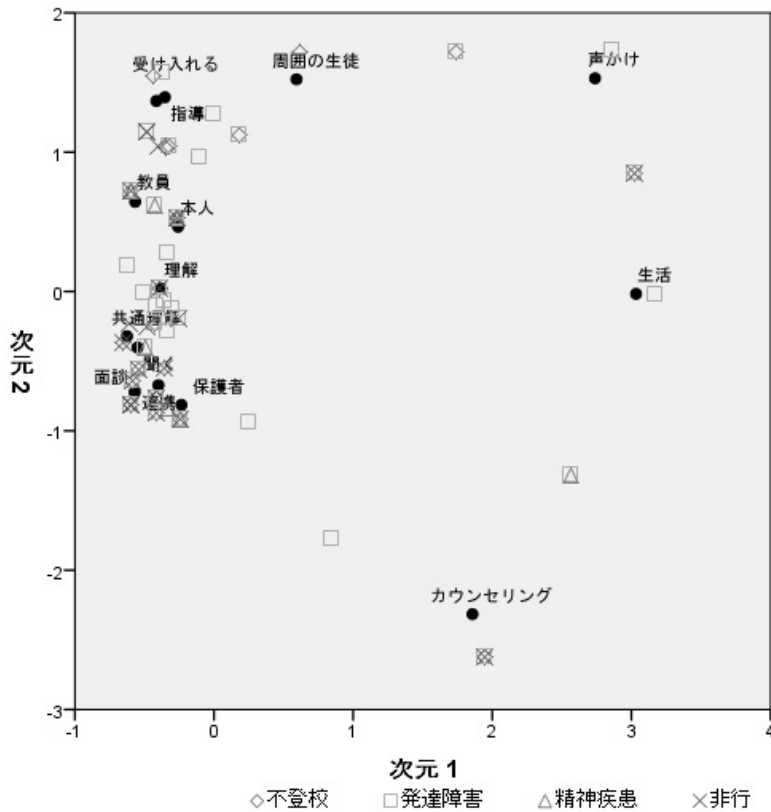


Fig. 3 生徒指導上の諸問題と実践内容カテゴリの関連性

解を深め、教職員とも生徒の特性や困り感について共通理解を図る介入を、効果的な実践としてあげていた。このことから、生徒指導担当教諭は当該生徒への直接的な介入に加えて、保護者や他の教員間の連携を円滑に行うための調整役としての役割を担っていることが示唆され、瀬戸・石隈(2002)¹²⁾と同様の知見が得られた。

さらに、本研究ではテキストマイニングで作成されたカテゴリからコレスポネンス分析の結果より、Fig.3 を作成した。得られた結果と記述内容を基に、生徒指導上の諸問題と効果がみられた実践内容との関連性を検討した。

「発達障害」のある生徒には生徒の特性理解を深め、学校生活において適切な指示や声をかけることが、問題の軽減には有効であることが推察された。「精神疾患」のある生徒には、保護者と関わりを密にとることを重要視していることが推察された。「不登校」生徒は、周囲の生徒に呼びかけて、当該生徒を受け入れる集団作りに取り組んでいることが推察された。当該生徒の居場所を確保することを、大事にしているのだと考える。「非行」におよんだ生徒では、面談を欠かさず行い、常に気にかけていることを当該生徒に示すことが、問題行動の改善に功を奏した介入として推察された。

中学校の生徒指導主事が苦慮する事例として、心の問題を抱えた生徒への対応がある。心の問題を抱えた生徒への対応については、対応が複雑化していることが示唆されている(片山・大村・関貫・涌井, 2010)⁴⁾。本研究では、高等学校の生徒指導上の諸問題に対して効果的であった実践において、中学校と同様に当該生徒の問題・課題が重複している事例が確認された。そして、効果みられた実践における介入方法では、当該生徒に対して、個々の特性や現況に応じて直接アプローチしていることが推測された。加えて、生徒指導担当教諭は、他の生徒・教職員・保護者といった周囲の環境調整を行い、複眼的な視点で彼らに対応していることも示唆された。特に、「発達障害」のある生徒への介入では、生徒の特性理解を深めることを重要視していた。このことは、生徒をよりよく理解することで、生徒のサインに気づき、早期発見・早期対応につながる(内田・伊賀, 2008)¹⁷⁾実践であると考察する。

さて、本研究における有効回答数は多いとは言いがたい。しかしながら、81人回答者は、生徒指導上の諸問題に対して積極的かつ真摯に向き合って実践を続けてきた生徒指導担当教諭

であると推測される。すなわち、回答数は少数ではあるが、実践内容の有効性が高い事例が集約できたと考えられる。加えて、自由記述によって得られた質的データを、テキストマイニングを用いて分析することによって、生徒指導上の諸問題と効果がみられた実践との関連を実証的に確認できたことは有意義であった。

今回調査の対象とした学校は、高校受験時の偏差値 50 未満の高等学校(普通科)であった。今後は、その他の学校種における支援内容を把握し、包括的に高等学校の現況を検証する必要があると考える。

文 献

- 1)秋光恵子・岡田みゆき(2000): 高等学校における学校組織特性が教育相談活動に及ぼす影響. 兵庫教育大学研究紀要, 37, 15-24.
- 2)イトクロ(株)(2012): みんなの高校情報, <https://www.minkou.jp/hischool/>(2012.6.30 取得).
- 3)兼子崇(2011): 高等学校における教員間の意識の共有化を目指す組織づくり. 山形大学大学院教育実践研究科年報, 2, 162-169.
- 4)片山紀子・大村優・関貫林太郎・涌井陽介(2010): 求められる生徒指導主事像. 京都教育大学紀要,117,17-34.
- 5)家庭教師のトライ(株)教育情報センター(2012): 高校偏差値一覧, <https://www.try-group.co.jp/exam/high/list/>(2012.6.30 取得).
- 6)河村茂雄(1999): 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発-学校生活満足度尺度(高校生用)の作成-. 岩手大学教育学部研究年報, 59, 111-120.
- 7)君山由良(2005): コレスポネンス分析の利用法. データ分析研究所,5-12.
- 8)文部科学省特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議高等学校ワーキング・グループ(2009): 高等学校における特別支援教育の推進について-高等学校ワーキング・グループ報告-, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/054_2/gaiyou/1283724.htm(2015.1.14 取得).
- 9)西尾克明(1996): 生徒指導主任の葛藤と人間関係. 小島弘道(編) 生徒指導主任の職務とリーダーシップ. 東洋館出版, p 183.
- 10)旺文社学校案内編集部(2012): 2013 年度入試用高校受験案内. 旺文社.
- 11)笹森洋樹(2011): 生徒指導と特別支援教育. LD 研究, 20, 171-179.

- 12) 瀬戸美奈子・石隈利紀(2002): 高校におけるチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力および権限の研究: スクールカウンセラー配置校を対象として. 教育心理学研究, 50, 204-214.
- 13) 田口禎子・橋本創一(2015): 発達障害・精神疾患およびその傾向がある高等学校「生徒支援の実態調査. 発達障害研究, 37, 186-199.
- 14) 田口禎子・橋本創一・菅野敦・横田圭司(2009): 東日本地域の高等学校保健室におけるメンタルヘルスや発達障害等の相談支援に関する調査研究. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 60, 457-463.
- 15) 高儀佳代子・恩田光子・岩城晶文・西川直樹・荒川行生(2011): テキストマイニングを用いた妊娠・授乳中の服薬に対する不安についての分析. 医療薬学, 37, 111-117.
- 16) 田代高章・八重樫一矢(2009): 高校生徒指導の現状と課題. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 8, 17-36.
- 17) 内田利広・伊賀真志(2008): 生徒指導主任の特性及び生徒指導上の諸問題に対する意識の実態調査—生徒への有効な関わり方とは—. 京都教育大学紀要, 113, 39-56.
- 18) 八並光俊(2008): 生徒指導のねらい「個別の発達援助」. 八並光俊・國分康孝(編)新生徒指導ガイド, pp.16-17.
(受稿 H28. 11. 7, 受理 H29. 1. 25)